

時計を見れば三時間が過ぎていた。

案外時間はかかってしまったけれど、まだ二十一時過ぎ。十分早い時間だった。山下くんの作業を少し手伝って、もう一度データをダブルチェックして。

「なんかあっさり終わっちゃったね」

「先輩の手際が良すぎるんですよ」

「そんなことないよ」

量は多かったけれど思ったよりも手直しは簡単で、これは私だけでも何とかなつたかもしれないな、なんて。

パソコンの蓋をぱたりと閉じれば、代わりに胸の中には安堵感が滲み出てくる。

「だけどき、山下くんがミスするって、珍しいよね」

思わず本音がポロリと漏れ出る。

「しかも、正直山下くんならすぐに気づくような簡単なやつじゃなかった？」

「…」

「あ、ごめんね。全然責めるつもりじゃなくて。山下くん優秀なのに珍しいなって思っただけなの。仕事頼みすぎて疲れてたかなって」

彼のうっかりをフォローするつもりだったけど、逆に責めるような感じになっちゃったかな。

黙ってしまった山下くんの方を慌てて見れば。

「っ…」

そこには、机に頬杖をついて妖艶な笑みでこちらを見る山下くんがいた。昼間の人懐っこい笑みは、欠片も残されてない。

「先輩って、ほんと隙だらけですよね」

「は…？」

ガタリ、と椅子を寄せて少しこちらに近づいてくる山下くん。いつもと纏う雰囲気

気が違っていて動けない。

静寂な部屋には、椅子が動く音と、フフ、と柔らかい彼の笑い声だけが響く。

「大混乱してる先輩も可愛い」

「か、揶揄わないでっ…」

「揶揄ってませんよ…とところでこのミス、本当にうっかりミスだと思います？」

「え？」

「もしこれがうっかりじゃなくてわざと全部間違えたんだとしたら？」

彼は何を言っているのだろう。

「わ、わざと…それは何のために…」

細められた瞳に、口の端だけが吊り上がって。

まるで、獲物を捉える直前の猛獣のような表情に、背中が粟立った。

「何のためでしょう？」

(中略)

ゾクゾクツ

「乳首、もう勃ってるじゃん」

俺触ってないのにピンピンじゃん。

「先輩、結構感じやすい？」

山下くんはフと笑うと、今度は両方の乳首をピンピンと弾いてくる。強い刺激なはずなのに、それがすごく気持ちが良い。刺激に反応してますます突端が固くなっていくのがわかる。触られるたびに、電流が走ったかのような快感が全身を伝って、椅子に座っている腰が徐々に切なくなる。

「あ、んっ、や、やめてっ」

「へえ、やめていいの？」

ニヤリと笑う彼は。急に乳首を叩く指先を離し、今度は胸を揉み始める。

「んっ…」

「こっちだけで足りる？いつまで我慢できるかなあ先輩」

「ああっ、うっ」

男らしい指先が、形を変えるほどに胸を強く揉み込んで。それはそれで気持ちが良いけれど、やっぱり決定的な刺激がないからもどかしい。

「ね、ねえ山下くん…」

「んー。そうだ、俺のこと下の名前で呼んでよ」

「ふ、ふえ？」

「そしたらさ、先輩が欲しいのあげる」

悪どい笑みを絶やすことなく、「早く気持ちよくなる？」と耳元に吐息と共に流し込んでくる彼に、もうすでに私は勝てる気がしない。

(中略)

背後から腰を掴まれ、一気に挿入された。

「そんな物欲しげな顔してさ、ナカもさつきより狭くてうねらせてさ、興奮してないっていうのは流石に無理があるんじゃない？」

先輩、案外変態の資質あるよね。

とんとんとんとリズムカルに奥の方で細かい抽送を繰り返されて、疼いていたナカが喜んでるのがわかる。足にどんだん力が入らなくなっていく。

「先輩がドエなの、あの男も知ってんの？」

「あの男って……」

「なんだっけ、先輩と仲良い奴」

「た、田中……」

「あーセックスしてる時に他の男の名前出すのはお行儀悪いよ」

どちゅどちゅどちゅ

お仕置きね、と。

急激に激しくなる動きに、私の足は完全に力を失い、悠真くんは腰を持たれて足が浮く。バランスを取ろうと、胸をギュッと窓に押しつけければ、鏡のようになった窓越しに、双丘をべったりと潰して窓になすりつけられる自分の胸が無様に強調される。

「あー先輩、俺に腰持たれて自分で動けなくなっちゃいましたね。俺にイイように使われるオナホになった気分はどうですか？」

「ああっ、や、やだあ、おろしてっ」

「え、めちゃくちゃ締め付けてきてるくせにまだそういうこと言うの」

「今度から、この会議室で会議する時、今日のこと思い出しちゃいますね」

「…っ」

「あ、考えて興奮しちゃいました？今すごいナカうねった」

ねつとりと腰を動かして、自分の形と大きさを私のナカに覚え込ませていく悠真くんと、後ろから好き勝手に突かれて、外に自分の裸とだらしな顔を見せつける私と。

(中略)

少しだけ戸惑った声が可愛くて、私のイタズラ心が刺激される。

彼の腕の中からズルズルと下がり、跪いてベルトに手をかければ、悠真くんは何をされるかがわかったようだった。

「ちょっと…え？先輩？」

「さっきのお礼」

ベルトを外し、スラックスのジッパーを下げる。

すでにボクサーを突き上げるような勢いで上を向いているそれは、生地越しに撫でるだけで「うっ」という声が頭上から聞こえてくる。

「キツそうだね？」

「ね、ほんと…」

ボクサーを下ろせば、さつき散々私のナカを抉った凶暴な熱杭が飛び出てくる。

先端がすでにぬらぬらと透明な液体で濡れていて、血管が浮き出たそれは、その先を期待していることがよくわかる。

「んっ…」

これまで、あんまり男の人のものを口に咥えたことはないけれど、悠真くんのものをしゃぶることに全く抵抗はない。口の中に先端を含んで、右手でゆっくり竿を握って扱けば、悠真くんの腰がゆっくりと動き始める。

「やば…」

ふうーっと息を吐いて何かを堪える姿は、想像以上に色っぽくて、私のナカがますます潤っていき、膝立ちになりながらも私の腰が揺れる。

「ひもひいい？（きもちいい？）」

「…さいっこう…」

ため息のような返事に、ますます気持ち昂る。口の中に太いそれをできるだけ加えて、先端をチロチロと舌で撫でる。手に込める力を少し加えて速度を上げる。

「っ。先輩、っ、それ、やば…」

コンコンコン

その時、フロアのドアをノックする音が聞こえた。

ハツとして急いで身なりを整えようとするけれど、フロアのデスクで悠真くんのお腹から下は見えないし、私もかがんでいる。

「すみません、警備です」

「はい」

「どうやら警備の見回りらしい。このフロアだけ電気が付いているから、まだ誰かいるのかと声をかけてきたのだろう。」